

能代高

(22)

雪だまむなし

「火事だあ」

「大変だあ」

ハツと目をさました小沢美喜男（18期、能代市教委体育係長）は、反射的に制服に着替えた。

昭和十九年二月十五日午前一時少し前――

一緒に下宿していた兄の悦郎（15期、山本町助役）は

「オレ、先に行くぞ」

一足早目に外へ飛び出して行った。悦郎は、あすに迫った卒業試験の準備で、徹夜で勉強中だった。

兄のあとを追って外へ出た小沢。その目に、真っ赤な炎が映

った。まぎれもなくわが能中がいま、焼けている……

下宿と学校は百メートルしか離れていなかった。小沢が学校に着いた時、本校舎中央付近が火を噴きあげていた。その一、二分後に、学校全体へ燃え広がった。

「そだ、こうしてだばいられねな」

小沢は、グラウンド側の柔道場へ急行した。これも、反射的な行動。

小沢は柔道部員だった。汗のしみこんだ自分たちの柔道着、青春をぶつけたタタミが、そこにあった。

「まんず、これ運べ」

上級生もかけつけた。指示に従って、タタミを運び出した。二人で一枚ずつ。六、七回もグラウンドとを往復したのだろうか……。

小沢がそうこうしている間に、反対側の銃器庫では、相沢昭夫（16期、能代市役所国保課長）らが懸命に銃を避難させていた。

風下の中和通り方面に、火の粉がどんだん飛んだ。野球のボールほどの火のかたまりが……。

野呂田直貞（15期、能代中央公民館長）は、学校前のおばの家へ行った。家財道具を運び、火の粉消しに奮闘。

ついに、白亜の殿堂全焼――

「まるで、軍艦沈む時みたいだ」
どつと焼け落ち、姿を消した愛する学び舎。火柱をあげ轟沈する軍艦そのもののような感じだと野呂田は思った。

「これでもか、これでもか」

燃えゆく校舎に向かって、力の限り雪だまを投げつける生徒、泣きそうになるのをじつとがまんして、いつまでも投げ続

ける姿。そこに、だれよりも学校を思う清らかな気持があった。

しかし、生徒の投げる雪だまでは燃えさかる火の手には勝てるはずはなかった。柔道場、銃器庫を残して、天下の能中は灰になった。

「焼けだ」

「焼けでしまった……」

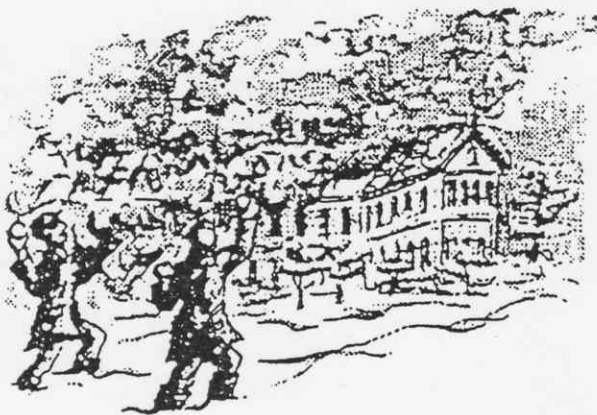
朝になって、汽車通学の生徒たちが続々登校した。

「焼けだ……」

お互いに、そう口にするだけだった。ポウ然とした時は、そんなものである。

あとでわかったことだが、火事の最中、ピアノを教室から運び出した勇敢な生徒があった。焼失をまぬがれた唯一の教材。先輩たちの栄光をたたえるスポーツ大会優勝たてなどの焼失。なんとも惜しまれた。

小沢は、夜が明けてから一度



さし絵は戸松恭一（新11期・能代高教諭）

下宿に戻った。兄の悦郎も帰って来た。

「卒業試験、どうなるべが」

「卒業式、どこでやるべが」

兄のシヨックの方が、はるかに大きかった。

当時五年生担任・宮腰斌一先生（前能代市教育長の心配もひとかたならない。上級学校進学のための手続きがまだすんでいない生徒もいた。重要書類が全部焼けた。成績など証明のしようがなくなった。

「これに気を落とさねで、がんばれ」

宮腰先生は祈るような気持ち。幸い、佐々木満（県企画調整部長）はじめ、15期生はみんな秀才ぞろい。堂々上級学校にパスしていった。

「まずいがった」

宮腰先生は胸をなでおろしたものである。

校舎がなくなつて、小沢たちは淳城一小に間借りした。三人一組で長机に座る寺子屋式授業。顔を動かすと隣がまる見え。テストの時は、監督の先生が二人ついた。

戦後。淳城一小、能代一中も火事で焼けた。一小が焼けた時、小沢の二人の子供たちは同小の一年と四年生。一中が焼けた時、上の子が二年生に在学中。

「なぜだか、自分の学校が親子そろつて焼けましてね」

学校が燃えた時の悲しさ……小沢はそれをいやというほど味わっている。
(敬称略)

